

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第30回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

信濃国の歌（巻第十四 三〇一―番歌）

中麻奈に浮き居る船の漕ぎて去ば

逢ふこと難し今日にしあずば

昼になって、小春日和の暖かさが増してきた。新幹線で長野に着くと、そのまま、取材のために長野電鉄で柳原に向かう。駅構内の出発時刻を待つ電車のなかで、することもなくつれづれに視界に入る人を見る。紅葉を楽しむためにガイドブックをしきりに眺める母娘。初めての路線で、普通電車が急行に乗るか行ったり来たりする夫婦。携帯電話のボタンをしきりに押す若者。山歩きの装備をして近くの子におだやかに話しかけている初老の紳士。ありふれた風景なのに、旅先ではみな映画の「コマのように思える。心の中に秋が詰まってきた。ついこの前、街の喧騒の中で木枯らしが服を叩くのもう冬だなと思った。秋をじっくり見つめることなんて、ここ数年なかった気がして、膝の上の本を鞆にしまった。列車が走り出して地上に出ると、黄色と赤のクレヨン画が目の前に広がる。遠く蒼い山の頂にはうすらと雪がかかっている。信州の見事な秋だ。万葉の碑を訪ねる短い旅は、いつも自ずと人の原点に戻るような、本当の自分を探すような時間になる。

碑建立の理由は様々だが、ここ中俣は万葉集に自分たちの住む地名の故事を求め、住民たちが発願して建てられたという。駅に降り立ち、改札で切符を渡した小さくて静かな駅だった。地図もないので歩き出す。迷ってもいい気がした。遠回りしても得をするような予感がして、クレヨン画の中にそのまま入ってしまった。「中麻奈に浮かんでいる船を漕ぎ出すように行ってしまうたら、もう逢えなく

なるだろう。今日でなかったら。」麻奈（まな）は、真砂（まなぢ）または、まご（まご）のことで細かい砂を意味する。未詳の地名だが、信濃に「麻奈」なる地名があつて、上中下に分けられたか、また、「ちぐまな」と読み「千曲川」という説もあるようだ。その砂地の様は、ふわりと浮かぶ船のいつ出してしまうかわからない不安を呼び起こし、今日でなければならぬ熱い想いにつなげている。明日は見えず、昨日は遠い。今、逢いたい。今すぐでなければ壊れてしまふ。大切なものが、つかんだはずの手の隙間からこぼれてしまふ。

今日、逢いたい。まだ、自分の中にはそんな熱い思いが眠っているのだろうか。青春時代のことだと大人のふりをして生きている今。万葉の歌は直截で大胆で、読んでいると自分の中の本当の思いや隠しておいたつもりの自分を呼び起こすときがある。あなたにはまだあるのだろうか、何かに対する、誰かに寄せる「熱い想い」が。

小一時間かけてさまよい歩いた。途中栗おこわを買ひ、その店で道を尋ねた。大根や野沢菜を洗う農家の人にも尋ねた。冬支度という言葉がしみじみと感じられてうれしかった。斜めになった道案内をみつけ、ようやくたどり着いたその碑は、秋の日差しのおかげで温かく迎えてくれた。



長野市柳原中俣区公民館前